

研究ノート

スウェーデンにおける幼児保育の特徴

— 日本における問題意識から見た最近の傾向 —

荒井 洸

Unique Points of Pre-schooling in Sweden

ARAI Kiyoshi

プロローグ 1世代分の時の流れを経て

スウェーデンを中心とする北欧諸国の幼児保育について関心を持ち、追跡するようになって35年ほどになる。

スウェーデンや、その周囲の国々にはしばしば出かけているのだが、そのおぼろげな印象は、気付かないうちにも少しずつ微妙に変化しているのだろうと思う。

しかし、はじめて訪問した1970年代初頭のころの状況と、現時点での状況とでは、かなり大きな違いがあることは、はっきりとしている。何しろ1世代分の歳月が流れていることだし、その間には東西の冷戦構造の解体や、いわゆるバブル経済の崩壊などもあったのだから当然のことだろう。

加えて、われわれの問題意識自体が大きく変わってきており、注目すべきポイントそのものが違ってきている。フォーカスの合わせどころによっ

て、印象に残ることや学ぶべき成果もずいぶんと異なってくるはずだ。

20世紀後半の1世代分の月日の流れの中で、われわれの日常の生活スタイルは大きく変わり、子育て観も変わり、家庭観も変わり、したがって幼児保育のありようや、そのバックボーンも確実に変わってきている。

さらには、幼児保育施設への期待感や改良への要望も変わってきている。

そこで、わが日本における幼児保育についての今日的な問題意識から、スウェーデンにおける幼児保育の特徴、特に最近の傾向のいくつかをピックアップして、若干の検討課題を掘り起こしてみたいと思う。

なお、最近のスウェーデン訪問は、2004年の秋である。

訪問した保育施設のある自治体 (kommun — コミューン) は下記のとおりであり、合わせて5か所の保育施設を訪問した。

- Täby (テービー) … Stockholm の北に隣接し、バルト海の入江に面している。
- Tumba (トゥンバ) … Stockholm から二つの自治体をあいだに置いた南に位置する。
- Jönköping (イエンシェーピン) … 南スウェーデンの大きな湖であるヴェッテルン (Vättern) 湖の南端に面した、州の中心都市。

I 保育の環境について

まずは外観的なところから見ることにする。

外観、すなわち見掛けはとても重要である。保育の雰囲気や姿勢を端的に表わしているからだ。

園を訪れたときの印象は、30年あまり前のそれと現在のそれとは、センスのよさという点では変わらない。

しかし、われわれにとっての感じ方は、現在のほうが深刻である。なぜなら、30年の歳月を経ても、わが日本のセンスとの落差は、それほどに変

わっていないからである。

スウェーデンの保育園の園庭は、簡潔な表現を使えば、牧歌的であり、生きた自然空間であり、広やかであり、平面幾何学的ではない。

地形による起伏は地ならしされることなく、できる限り自然の形状を生かしている。丘あり、谷あり、斜面あり、林あり、茂みあり、といった具合いで、地面には芝草が広がっている。

このことは、生命体としてエネルギーに成長しつつある子どもたちの遊びの空間、すなわち保育環境というものにとって、最も根本的なテーマを投げ掛けている。

日本の園庭を振り返ってみよう。何故に学校の校庭風なのだろうか…。

問題は、園庭についてのフィロソフィーの有る無しということではなからうか、と私には思えてしまう。

保育園の「園」、幼稚園の「園」、Kindergartenの“Garten”についてのフィロソフィーの有る無し、ということである。

今回訪問した保育園の名前を思い起こしてみると、「緑のつた保育園」あるいは「白樺の小屋保育園」といったものがあるが、名前からしてエコロジーを感じさせるものが多い。このことは、幼児保育の前提ともなるべき自然観そのものがまずは問題である、ということである。

あちらの保育園を巡り歩いたときに、つくづく思ってしまうのが、まずはこのことである。



テービーの、松の木などの緑に囲まれた「緑のつた保育園」



イエンシェーピンの、広やかな起伏を生かした「西保育園」

II 子どもの生活記録について

子どもの生活の状況や成長についての記録類は、保護者にとっても、保育者自身にとっても、重要なものである。

記録をとるという行為自体、さらには記録をもとにして関係者が検討し合うことは、幼児保育という営為にとっての^な^めとも言ってもよい。

ここで、わが日本の厚生労働省による「保育所保育指針」と、文部科学省が出している「幼稚園教育要領」をしてみるのだが、この記録に関する項目が見当たらない。どうしたことだろう。

“計画”については、前者は「第1章 保育の計画作成上の留意事項」として、後者は「第3章 指導計画作成上の留意事項」として、一つの章をしっかりと立てて論じているのだが、“記録”についてはまるで見当たらない。

ちなみに、「保育所保育指針」における“計画”についての扱いは少々書き過ぎの感があり、実際に日々の保育に携わる者にとっては、理解という点でも、実行という点でも、必要以上に難しくさせられているといった感じだ。計画倒れは、デスク・ワークがもたらす典型である。

さて、今回のスウェーデンへの旅での成果のひとつは、この“記録”についてのことであった。

イエンシェーピンのコミューン（自治体）が運営する保育園を訪問したとき、このことが大きな話題になった。

英語でのやりとりを整理すると、あちらの見解ないしは実行していることは、次のような内容にまとめられる。

- ①Documentation …… 子どもの生活状況や成長ぶりを記録したり、写真に撮ったものや子どもが描いた絵などをファイルする。
- ②Discussion …… 記録やファイルされたものを見ながら、スタッフ同士で、あるいは保護者も交えて話し合う。

③Consultation …… 記録を見たり、話し合ったことを参考にして、保護者は必要に応じてアドバイスを求めたり、相談をしたりする。

思うに、いわゆる少子化時代と言われる現代にあっては、子どもの生活ぶりや、心の動きや、成長についての豊かな内容をもった記録類は、子どもを思う心がより深まってきた保護者にとっては何よりのものであろう。

食事の傾向、屋内や屋外での遊びの様子、1日の生活リズム、健康状態、成長についての注目点、友だちや保育者との人間関係、さらには子どもが製作したもの等々が、具体的な描写や映像で記録されたりファイルされていたなら、それは貴重である。

さらに、それらの記録をもとにして、当の子どもについて立体的なディスカッションがなされたとするなら、それは幼児保育にとっての醍醐味とも言ってよいだろう。

イエンシェーピンにおける“document”についての論議は、われわれにとって意味深い刺激となった。



子どもの写真と名前が付けられた、子どもごとの分厚いファイル

III 基礎学校の“0学年”について

スウェーデンにおける義務教育は、第1学年から第9学年までの9年間であり、これを「基礎学校」(grundskola)と呼んでいる。前期中等教育までが義務制であることは、日本と変わらない。

しかし、第1学年への入学年齢は日本よりやや遅く、子どもが7歳になる年の新学年度(秋学期のはじめ…8月中旬)からである。

義務教育の終了は、16歳になる年の学年度末(春学期のおわり…6月中旬)である。

ここで注目しておきたいことは、日本の小学校1年生に該当する子どもの扱いについてである。

われわれが日本で春4月に見る、あの肩よりも大きなランドセルが歩いているような、いとけない子どもたちについての対応である。ちなみに、今のランドセルは、中身とともにとても重い。

スウェーデンにあっては、この年齢の子どもたちは、かつては就学前保育施設、すなわち日本で言う幼稚園や保育園で過ごしていた。だから、この国は日本より1年分だけおっとりとやっているな、という印象であった。

しかし、前の世紀の最後の10年あたりから、この年齢の子どもたちは徐々に学校側に移動するようになり、ほとんどの子どもは就学していることとなった。

それは、保護者が希望する場合には、この年齢の子どもについては、学校側に属する“0学年”に自治体が受け入れる義務を負うことになったからである。

加えて、義務教育と同様に無償の扱いでもあるからである。このことは、保護者にとっては取りあえずありがたい施策である。

自治体の受け入れについての義務は、1997年秋の新学年度からスタートした。したがって、9年制の義務教育は、事実上は10年制に移行したと考えてよい。日本式に言えば、高校1年までである。

興味が引かれることは、この“0学年”の教室内の雰囲気についてである。

2年前、バルト海のストックホルム群島の中のある島の、閑静な住宅地で見た教室内の光景は、とても印象に残っている。

ひとことで言えば、まさに幼児保育と学校教育のあいだに位置するといったものであったからだ。

教室内のインテリアや教材類の置き方や机の配置などは、まるで一斉授業のスタイルではない。子どもたち数人で囲むしゃれた机のほうに、教師自身が歩み寄って指導をするというスタイルである。

教室内の雰囲気は、カラフルで明るく、楽しげであり、保育と教育の断絶が見事に中和されている。

ランチタイムになると、子どもたちは隣接する保育園の園庭に建てられたランチルームに食事をしに行く。

また、外遊びの空間はといえば、遊びなれたひろびろとした保育園の、緑に包まれた園庭を自由に使う、といった具合である。

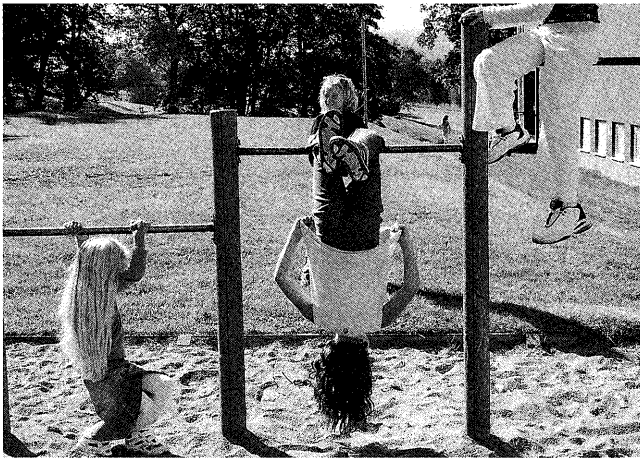
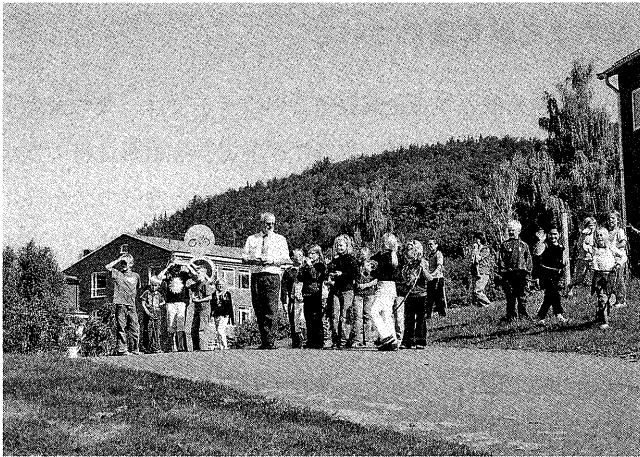
1クラスの人数は20人ほどであり、担任の教師とアシスタントとの2人で指導に当たっている。

なお、基礎学校は、ジュニア・レベル、ミドル・レベル、シニア・レベルの3段階に分かれており、校舎自体もそれぞれ独立していたり、二つのレベルが合体したものがあつたりといったものが多い。

聞くとところによると、あまり大きな規模のものは作らないというのがスウェーデンの方針のようである。

とにかく、保育園での生活や幼稚園での生活と、学校における学校教育スタイルとの断絶は、中和され、滑らかなものにならないといけないと思う。

スウェーデンにおける“0学年”については、大いに注目すべきだと考える。



イエンスェーピンの、北の郊外にある基礎学校。周囲に塀は一切なく、ひろびろとした緑の斜面が活かされ、眼下にはヴェッテルン湖が広がっている。

IV 企業による保育園について

福祉サービスを対象とする企業経営というテーマは、今や大きく浮かび上がってきている。このことは、福祉サイドとして運営されてきた日本の幼児保育について見ると、はっきりとした課題となりつつある。

ストックホルムの北に隣接する自治体の Täby (テービー) にある「緑のつた保育園」(Förskolan Murgrönan) は、完全な企業としての保育園であった。

経営規模について聞いてみると、スウェーデン全体で64か所にものぼる施設を運営しているという。驚きの数値であった。

その内訳は、就学前保育施設が52か所であり、基礎学校が12か所となっている。

“福祉国家”というイメージでスウェーデンに注目してきた自分にとっては、数値もさることながら、教育機関あるいは福祉施設の経営という意味合いから大きな驚きであった。

しかし、わが日本のことを振り返りながら考えてみれば、当然至極のことのようにも思われる。私立の幼稚園や小学校などのことを想起すればよいからだ。あに、スウェーデンにおいておや、である。

保育者であるスタッフたちの説明にも、コスト意識が十分に感じ取れる。経費の効率的な運用という点では、園経営のすべてにわたって目配りがなされていることがよく分かる。

説明を聞きながら、ふと余計なことが思い浮かんできた。もし、ここに日本の公立の園の園長やスタッフがいたとしたら、どんなふうに受け止めるのだろうかと……。

預かっている子どもは、生後15か月から就学前までであり、合計75名である。

この園は年齢別にクラスが作られており、クラス別の児童数は次のとおりである。

- 1～2歳児クラス……15人
- 2～3歳児クラス……16人
- 3～4歳児クラス……22人
- 4～5歳児クラス……22人

保育者の配置は、各クラスとも3名である。見逃せない数値である。

各年齢のクラスの規模と、保育者の配置についての印象はどうだろうか。

低年齢児のグループ構成は、やや大きすぎるだろうか。しかし、3～5歳児クラスに対しての保育者の配置については、わが方からは何の発言もなし得ない。日本の幼稚園についての規準などは、数値を書くことさえ躊躇される。1人ひとりを大切に、といった標語が泣いている。

なお、園全体としては、この他に2名のスタッフが用意されている。

開園時間は、午前7時30分から午後5時30分までである。母親など保護者の就労時間が、全体的に日本よりやや早めであることが反映されているようだ。ただし、通勤時間は日本のそれよりも、かなり短いものと思われる。

入園当初の子どもや保護者への対応について注目しておきたい。

子どもが園生活になれ親しむ期間を、一応3週間と考えていること。

少なくとも最初の1週間は、保護者も子どもとともに園に滞在するということ。

早い時期に、スタッフによる家庭訪問を行うということ。その際の家庭での滞在時間は、たつぷりと1時間ほどとということ。

これらのことがらは、子どもと保護者、すなわち家庭に対しての理解や配慮という点で大いに参考になるのではなかろうか。

純然たる企業経営というスタイルとは少々異なるが、イエンシェーピンの郊外の住宅地にある、やや小ぶりの園は、小ぶりであるという点で注目に値する。

「パンダ保育園」(Förskolan Pandan) というこの園は、2～3の家庭が互いに協力し合って子どもを預かるという形から出発したものである。

スウェーデン政府（社会福祉庁）が、このようなスタイルを勧めていたことが思い起こされる。

要するに公立ではない。

毎年度末には自治体に経理報告をして、自治体と国から相当の補助金を受けるというスタイルである。

子どもは1～5歳の25名であり、見た目にもアットホームな感じである。

園長は、まだ青年らしさを残した中年の男性であった。前歴を聞くと、企業において統計事務の仕事をしていたという。

この仕事が面白いかと聞くと、大いに面白いという。さらに、大学では何を専攻したのかと聞くと、経済学と教育学であるという。自分はこの答えに、なるほどと大きくなずいた。

園舎の外観は住宅風であり、周辺の民家とマッチして穏やかである。

近くの森に、毎日のように散歩に出るといふ。

頼んで森に連れて行ってもらった。まるでトムテ（北欧の伝説に出てくる小人）がたわむれる森の世界である。北欧の絵には、このような森を背景にしたメルヘンがよく描かれている。

自治体が管理しているらしく、森の中は清潔で美しく、そして自然そのものが生きている。

コケやキノコ類が足元に広がっている。踏み締める足元の感触が、実にソフトだ。この感触はこたえられない。

なだらかな斜面には、子どもたちが作ったという、小枝を使つての小屋らしきものがある。トム・ソーヤーの世界だ。少年時代が思い出される。

同道した日本の保育者たちは、老いも若きも夢見心地に浸っている。保育の原点である本物の“自然環境”を、全身で感じ取っているからである。森の空気は格別である。



園舎内から近隣の住宅を見る。
イエンスケーピンの「パンダ保育園」

目下、日本の保育界は混沌としている。

枠組みとしては、幼・保の問題、公・私の問題、中央・地方の問題、補助金・財源の問題、などがある。

しかし、利用者である保護者からすれば、生命体としての幼な子の健康で幸福な日々、心身ともに成長していくわが子への期待が根本である。

保育を担う人たちにとっては、理解困難な政策面への対応と、快適でセンスのある園生活を工夫する毎日である。

さまざまな面で先駆的な仕事をしてきたスウェーデンなど北欧への目は、やはり離すことはできない。

<参考>

- Tina Meri “Children first — Growing up in Sweden” The Swedish Institute, 2003.
- 荒井 洸著『スウェーデン 水辺の館への旅 — エレン・ケイ「児童の世紀」をたずさえて — 』富山房インターナショナル, 2004.
- 荒井 洸著『園生活における知育 — Care（生活）& Education（教育） — 』明治図書, 2004.